39

平成15年10月5日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（三四）

第四七則　趙州柏樹

〔示　衆〕

衆に示して云く、庭前の柏樹、竿上の風幡、一華もて無辺の春を説るが如く、一滴もて大海の水を説るが如し。間生の古仏、迥かに常流を出ず。言思に落ちざれば、若為んが話会せん。

〔本　則〕

挙す。僧、趙州に問う、如何なるか是れ祖師西来の意（多羅は閑管なり）。州云く、庭前の柏樹子（焦搏にて連底た凍を打著せり）。

〔頌〕

頌に云く、岸眉は雪を横たえ（塩を喫むるの多きこと、米を喫するが如し）、河目は秋を含む（一点も謾き難し）。海口は浪を鼓し（有句は宗旨に非ず）航舌は流れに駕る（無言は凡聖を絶す）。撥乱の手（也た是れ柏樹）、太平の籌（也た是れ柏樹）、老趙州、老趙州（甚としてか応えざる）、叢林を攪攪して卒かに未だ休めず（天童は第一）、徒らに工夫を費やして車を造って轍に合う（将ち来って使用するに恰好たり）。本と技倆なきも壑を塞ぎ溝に塡つ（風流を買い尽すも銭を著いず）。

今則は、数ある禅門の公案の中でも、最もよく知られている部類に入る「趙州柏樹」です。『無門関』の中にも採録され、道元禅師が古則公案を集めた『三百則』の中にも入っています。また、禅師は『正法眼蔵』の「柏樹子」一巻を著わし、この有名な公案を縦横に拈提されています。

趙州とは、いわずと知れた趙州従諗（七七八～八九七）さんで、一二〇歳を生きた一大長寿者。唐代に河北省観音院で並はずれた禅風を振い、道元禅師をして「趙州以前に趙州なし、趙州以後に趙州なし」と嘆ぜしめたほどのスーパーマン。『従容録』には何度も登場しますが、今回は第一八則（第六回）、第三九則（第一四回）、第五七則（第二七回）についで四度目です。なお、今回の〔本則〕はいたって短いので、宏智さんの〔頌〕の部分も掲げました。これが『従容録』本来のスタイルなのです。

まず、万松さんの全般に対する批評の〔示衆〕です。

「庭の柏や竿の幡などは、みな目前の事物によって宇宙の真理を示したもの。古今に卓絶した大宗匠が、ケタ外れ

の説法をしたものよ。その核心をどうしたら会得できるかな」、といったところ。

「竿上の風幡」とは、六祖さまが広州法性寺で、僧達が幡が動くいや風が動くと議論するのに対し、幡も風も動かぬ、動いているのは諸君の心だ、と教えた有名な公案。「間生」とは五百年に一度世に出る大人物のこと。万松さんの趙州に対する讃嘆の言葉です。

次に〔本則〕を意訳しましょう。

雲水が教えを乞う。「いったい、祖師西来の意義は？」

趙州先生「ウン、庭先の柏の木の実さ」。

ただこれだけ。眼目は「祖師西来意」とそれに対する「木の実」です。言葉上は、「ダルマさんがインドから中国へ来て伝えたものは何か」という質問ですが、つまりは禅の究極的な意義への問い。なんていうと、抽象的になってしまいますね。ズバリいうなら、この問いは「おのれ自身は何ぞや」ということです。これが禅を学ぶ者の眼目でありますから、「祖師西来意」の問答は古今東西しょっちゅう繰返されるのです。万松さんのコメント「多羅は閑管」とは、お経なんか不要ということ。自己の問題に答えられる者は、それこそ自己をおいて他にないからです。

さて、この問いに対する趙州の教えがスゴイ。「庭先の柏の木の実」とは。唐代の観音院の庭にはおそらく柏の大樹がそびえていた。ただし、「柏」はコノテガシワのことで、中国の北地に多い針葉樹であって、日本のヒノキやサワラのたぐい。「子」は接尾語ではなく、木の実のこと。つまり、趙州は自己の問題は庭にいっぱい落ちている小さな柏の実だ、というのです。雲水は果してわかったのでしょうか。

柏の実など、ありふれたもの。でも、ありふれたものとは人間さまの勝手な価値観であって、すべてのモノは絶対の存在であり、かけがえのないイノチ。一木一草、泥水も石ころも。これがわかれば、自己の問題は自己で体得しなければならない道理です。

自己の問題とは、いったい何を問題にするのでしょうか。それは、私たちが自分の性格や思考や身体や技量や頭脳などを自問することなどではありません。もっと根源的で、しかも切実な本分の問題であります。今則で掲げた宏智の〔頌〕は、ご覧のとおり長々と美辞麗句を用いて趙州のすばらしさを讃えてはいますが、残念ながら自己の追求はなされていません。

長い航海の末に、中国へ来て禅を伝えたダルマさん

また、道元禅師は「柏樹子」の巻で右の問答の続きを引き、柏樹子の仏性は地に落ちる時に成仏というかたちをとって現われるという修証不二の立場を展開されますが、そこでもやはり自己の問題にはふれていません。

そこで趙州さんに戻って、『趙州禅師語録』の中を探ると、まことに恰好の問答がありました。問「急切の処、請う師の道わんことを。」師云く「尿は是れ小事なるも、老僧自らが去きて始めて得し」と。これは、僧が我身に切迫したギリギリの処を質問したのに対し、趙州が「小用などはつまらん日常のことだ。だが、必ず自分で行くしかないんだ」という答えなのです。上品、下品などの論ではなく、決して人さまに代ってもらえないもの、それこそが最も切実な自己本来の事だ、という教えです。

これでわかりますね。私たちはいかに乗物の恩恵にあずかろうとも、どんなにパソコンが便利にはたらいてくれようと、所詮自分自身で決断をくだし、処置しなくてはならないことのほうが、実は圧倒的に多いのだということを。これは生きるための原動力といってもよいでしょう。だからこそ、そこに個人々々の尊厳性があるのです。私たちは、こんな当り前のことに気づいていない。してみると、禅はむずかしい理屈を教えるのではなく、私たちが生きている原点、生きるための原理を指摘してくれるのです。坐禅はその根本行。ほかならぬ自分の足の痛さも、実はありがたい。眠さに打ち勝つのも私自身の問題なのです。

現今の日本では、毎年何万もの自殺者がある由。「祖師西来意」を参究していればと、残念でなりません。

一夜接心

六月七・八日

恒例となっている「一泊参禅会」が、今年も六月七、八日の両日、天徳山龍泉院に於て行われました。（参加者二五名）

この行事は長年「一泊参禅会」という呼び名で親しんでまいりましたが、第一八回目の本年から「一夜接心」と改称。

今回の禅講では禅堂における基本が書かれている『重雲堂式』を講義頂き、古参の方も新しい人も初心に戻った思いが致しました。改称と相まり新たな出発の会となりました。

「一夜接心」に参加して

野田市　貝森　武夫

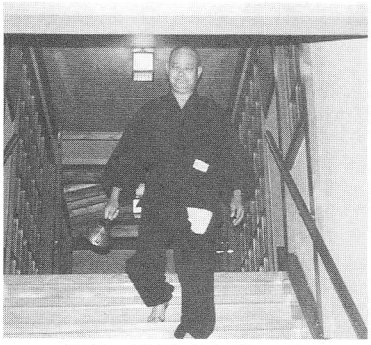
私が龍泉院の参禅会に通いはじめてまもなく、恒例の「一泊参禅」の参加者の募集が始まりました。が、老師から「一泊参禅」を「一夜接心」に改めてはどうか、「一泊」よりは「一夜」の方がインパクトがある、という提案があって、今年から名称を「一夜接心」に改めての募集でした。

「一夜接心」は六月七日、八日に設定されていて、二日目の六月八日は、私は生憎、既に予定が決まっていたので、初日の六月七日だけで日帰りする許しをいただいて、参加することにしました。

前もって、「一夜接心差定」が渡されていました、それによると、一日目に坐禅は三炷行う予定になっています。これまで三炷の坐禅の経験はありませんでしたので、足の痛みを心配していました。が、〝案ずるより産むが易し〟で当日は痛みもそうひどくなることも無く坐ることができました。一日を終えて、帰るのは私ともう一人くらいで、ほとんどの方が泊まる中、後ろ髪を引かれる思いで家路につきましたが、帰りの車中は、なんとも言えない爽やかな気分でした。

こんな気持ちいい坐禅ができるのも、坐禅をするための配慮が行き届いているからです。いい加減なところがひとつもありません。キチッとしていて隙がないのです。受け入れから帰るまで、食事も、何もかも、会員の自主運行ということにも驚きました。後日、「一夜接心」の写真を戴きましたが、坐禅をしている写真はそれまで持ち合わせていませんでしたので、これも感謝感激でした。

話は変わりますが、私は春頃まで、全く落ち着かない日々を過ごしていました。去年四月、三五年間勤めた会社を早期退職せざるをえなくなって、毎月ハローワークに通う身となっていました。が、無念やるかたない気持ちがずっと残ってしまいました。離職は、身の置き所を失ったばかりでなく、



振鈴で起床を知らせる

心の拠り所・置き所を失ってしまいました。心が一向に定まらず、安定してきません。そのような状況、状態で一年が過ぎようとしていた頃でした。ご縁に恵まれ、柏市の戸塚英明さんに誘われて、私が初めて龍泉院の参禅会に参加したのは、今年三月のことでした。

龍泉院に入りますと、鳥が啼き花が咲いて、自然の静かな空間です。その上掃除が行き届いて、塵ひとつ落ちていません。本堂はもちろん庫裏なども整理整頓が行き届き、東司も清潔です。きちんと磨かれ、いつもスリッパはそろえられています。そのような環境に身を置いて毎日の例会に参加して坐禅をしていますと、気持ちよく坐禅ができるのです。しかも時には警策を受けて身が引き締まります。老師の法話を拝聴し、参禅会を終えて帰る時の気分が清々しいのです。

禅講に聞き入る参加者

そして集中的に坐禅をする「一夜接心」を境に、私は、冷静さを失っていた気持ちに、落ち着きと余裕を持てるようになりました。やっと早期退職を受け入れ、その境遇を楽しむゆとりさえ持つことができるようになりました。不安定な心が安定してきたのです。これは私にとって、大きな心の転換点になりました。龍泉院は、私にとって癒しの空間だったのです。

自然治癒力

我孫子市　清水　秀男

大自然は偉大なる自律的復元力を持っている。本来の秩序を逸脱する現象が生じると、常に元に復元しようとする力が働き、秩序ある安定した状態に戻る。これらは大自然の摂理または、大地の道理と言うべき偉大なる力である。

我々人間もこの大自然とぶっ続きの世界に存在している。椎名老師が言われる「大宇宙とぶっ繋ぎになっている自分の命」として存在している。

ところが人間が病気になるというのは如何なる状態を指すのか。それは生命の秩序力が欠如したり、バランスに欠けている状態ではないだろうか。大自然が復元力を持っていると同様に、自然の一構成員である人間も、その状態を回復させようとする偉大な力を誰もが持っている。それが自然治癒力と言われるものである。自然治癒力があるということは生命力があるということであり、生命を生命たらしめているのが自然治癒力であろうと思います。

次に病気の場合の薬の役割とは何かを考えてみたいと思います。まず、薬が効くということはどういう事でしょうか。薬は抗生物質のように、体に侵入してきた細菌等の病原体を殺すものもありますが、普通は化学物質の作用を利用して、病気の原因になっている体内の物質の働きを阻害したり、病気を回復に向かわせる体内の物質の働きを助けたりして効果を出すもので、あくまで脇役です。

即ち薬の役割は、病気を治すのではなく、それは人間が本来持っている自然治癒力の働きを活性化させ、補強するものでなければなりません。病気を治すのは、あくまで自分自身の生命力、自然治癒力なのです。

従って、自然治癒力を高めることが人間を精神的にも肉体的にも健康にし、生命力を高める近道であろうと思います。

しからば自然治癒力を高めるにはどうしたら良いでしょうか。

「体質と季節に合った食事」
「生きる目標を持つ」
「笑い」、「スポーツ」
「大自然の中に身を置く」
「中国医学・気功・鍼・灸・漢方薬」等々が良いとよく言われています。

しかしこれらの方策の根底に必要なものは何かを考えた時、次の二つの事が重要と思っています。

一、我々の命は大自然の大きな命（サムシンググレート＝仏）に繋がっている事を気付かさせてもらう事。

「夜、かすかな雨の音、風の音、これは仏さまがこの人の世をおあるきになる足音です」

（榎本栄一先生）

二、そしてそれら大自然の恵みに感謝と謙虚な気持ちを持ち、生かされている自分の命に有難く気付

かさせてもらう事。

「吹けば飛ぶような、このちっちゃな生命を、天地いっぱい、宇宙いっぱいが総がかりで生かしてくれている。天地いっぱい、宇宙いっぱいと匹敵するほどの価値ある生命である事を自覚せねばならない」

（米沢英雄先生）

そして身を整え、呼吸を整え、心を整える事によって、呼吸を通して大自然の大きな命との交流が出来る坐禅が、自然治癒力を高める最良の実践だとの思いを深くしています。

「若し坐禅を学ばば、
すなわち坐仏なり」
（正法眼蔵坐禅箴）

老梅山吉峰寺

―幸道上座は元気で修行中―

松戸市　小畑　節朗

吉峰寺は永平寺より一里（八キロ）程更に奥に入った山中にある。

寛元元年（一二四三）道元禅師御年四四歳、住み慣れた京都深草の地を後にし、越前太守波多野義重公の勧めを受けて北越入山を果たされ、越前（福井県）の白山天台系の寺院吉峰寺に一時錫を止められる。ついで寛元二年永平寺が建立されるが、この間にも吉峰寺に於て『正法眼蔵』の示衆が続けられた記念すべき寺が吉峰寺である。

その後、吉峰寺は荒廃したが、明治三六年（一九〇三）に田中佛心和尚がこの霊跡を復興し諸堂を再建、永平六四世大休悟由禅師を請し中興開山とした。当寺参拝の栞に「道元禅師入越初開坐禅道場」の文字があるが、その通りの浄域である。

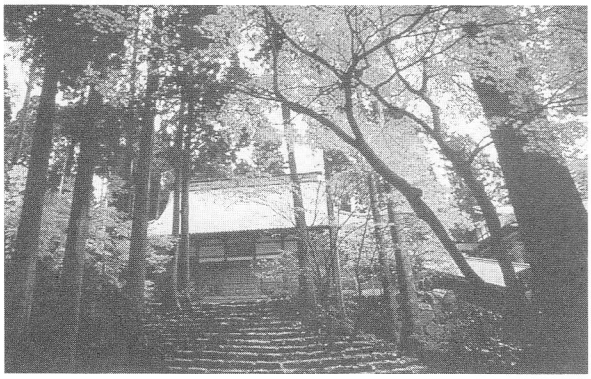
さて、三月に永平寺に上山、三ケ月衆寮で過した伊藤幸道上座は七月三日付で、永平寺の外寮舎である吉峰寺に転役した旨来信があった。永平寺では何故か幸道上座は呼び名を〝未来〟としている旨も葉書に認められていた。

私事で恐縮であるが、所用で年に三、四回福井県大野市に行く。七月二五日大野での仕事が昼過ぎに終了、気になっていた未来上座を吉峰寺に訪ねることにした。修行中に俗人が行くと、修行の邪魔かとも考えたが、意を決して車上の人になる。

車は勝山市の九頭龍川の左岸を福井方面に向って走ると上志比村小舟渡という処に至り、左折して二キロ、吉峰寺徹通坂前の広場に出る。更に登ると駐車場があり、老杉を通して法堂が見えてくる。庫裡の木版を打つと黒衣の僧が玄関に現われた。なんと未来上座ではないか。こちらも驚いたが、向こうも何故？という処である。

吉峰寺転役後は典座に当てられたため居残っているが、他の衆僧は山作務に出ている由である。

三〇分程待って、接司（せっす）和尚が作務より帰られたので挨拶。未来上座が龍泉院参禅会の一員であったこと、出家得度後、永平寺修行につき元気な顔を一見したいので吉峰寺を拝登したとの旨を述べる。



現在吉峰寺は一七名の修行僧が堂長渡辺孝道老師の下で弁道を行じており堂長老師は本日他出されているとのこと。本年永平寺は安居者が多く、僧堂の坐禅も二重単になる程で、吉峰寺も一七名の修行僧を得て活況を呈しており、未来上座もその一員として弁道の実を挙げられているとのお言葉を頂く。

接司和尚は三〇歳になるかならぬかの年頃、未来上座もそうだが眼が実に清清しい。利害得失に汲汲としている私の如き者とは全く別人だ。会っているだけで此の身が浄化される。

法堂と開山堂にお参りして辞去。弁道専一、手紙など一向にお構い下さるな、と言われお別れする。接司和尚が未来上座を促して見送るよう指示、山門頭で車が見えなくなるまで合掌して見送ってくれた。交わした言葉は少なかったが豊かな一時であった。車の中で私も合掌して、しばし蝉しぐれを聞きながら山を下った。

ご縁に感謝する（上）

沼南町　永野　昭治

緩やかな坂道の両側は、老杉と檜の巨樹が天に伸びて幾層にも重

なっている。足元に揺れている僅かな木漏れ日を逐っていくと素朴な造りの総門が斜に構えて憶いに沈んでいた。

薦福山宝慶寺は、坐禅と托鉢を中心とした道場を相続している古刹である。また我が禅会が祖蹟参拝研修の旅の折に、一夜接心を行じた道場としていま尚記憶に留めている。入母屋造りの楼門をくぐると堂宇は三方を樹林にまもられて静かに佇んでいた。銀杏峰は南天に聳え立っている。

「因縁」という説があります。勝れた師、親しい道友との出逢いがあって今こうして上山の約束が叶うのも、因縁によるものと心得るほかない。板木を打って大道会弁道法摂心のための来山を告げて、六日間のご指導を受けることとなった。参禅者は、他寺院の徒弟、外国人男性、七〇才を優にこえられた老人は、数回を重ねるという。日を経るに随って増減があり、一六、七名に達した日もありました。

接心に先立って、『普勧坐禅儀』に則った「坐禅の要領」について、田中真海御老師の懇切なご指導を受ける。仏道を信じて、身心を調える準備をし、勇猛精進の心をもって禅定に入る。禅定中は、頭の中が散乱、昏沈していないか、一切を断ち切って、只ひたすら坐るのみ。腰に力を入れて坐りなさい。角帯を腰に確りと捲くとよい、と仰しゃってご自身の姿をご披露なさった。坐禅の姿勢を容易に保つ仕掛けがあったのだ。確かに工合がよく取り分け私のような初心者にとっては効き目がある。

大道会接心差定（四月三〇日～五月五日）

三・三〇　板三打、洗面
　　後夜坐禅
五・三〇　大開静
五・五〇　止静
　　朝課　祇園正儀
　　僧堂行鉢、抽解
　　日天作務
　　行茶
八・五〇　作務
九・五〇　板三打（終了）
一〇・一〇　止静（提唱）
一〇・五〇　経行、抽解
一一・一〇　止静　発菩提心、
　　義雲禅師願文、僧堂
　　行鉢
一三・五〇　作務
一四・五〇　板三打（終了）
一五・〇〇　行茶
一五・三〇　止静
一六・二〇　経行鐘、抽解
一六・三〇　止静　晩課
　　薬石（庫院）
一九・一〇　止静
二〇・四〇　正法眼蔵坐禅儀
二〇・五〇　更点、開枕鐘、
　　抽解、打眠

――次号に続く――

良寛さまも登ったろう
四国遍路巡拝の記

流山市　久光　守之

五月一二日、緑の風の中、八四番札所屋島寺への遍路の山道を登る。この急な山道は、仏に会い、仏に見守られる、涅槃の道場である。

良寛さまも、おそらく没絃の琴を抱えて、この道を越えられただろう。その微妙な絃のない琴の奏でる、「騰騰として、天真に任す」とは、生死を道に任し、生死を仏に任し、そして生死を生死に任すと言う、高祖様の御言葉であろう。

そんな事を考えながら登る道の右は、屋島の古戦場。きらびやかな平家の公達の、すすり泣く声、源氏の武者の歓声が、遠くから聞えてくるような、寂かな古道である。

風を捉えるこの道を、山頭火も煩悩の炎を見つめながら、西行法師が、そして八四才の歌舞伎俳優の八世市川団蔵（八八番の大窪寺を打ち止めた後、小豆島坂手沖にて入水自殺。遺書なく、亡骸は不明。）が、そして多くの巡礼が、涙を流し、又は歓喜に咽びながら歩んだこの道を、四巡目の遍路をして、救わせていただいている。

この古道は、風を捉えて風と同化し、三世諸仏が法を説く、火焔裏の涅槃の大道場であり、また不生不滅それ涅槃なりと、法が仏を説く道でもある。

今朝、路端にて休憩していたら、「一寸待っていて下さい。おにぎりを作りますから。」と三個接待していただいたおにぎりが、海苔の香を漂わせ、その情けがありがたく、おいしく丁寧に頂く。

情けを握って下さった方の、鉄樹の華が開いて世界全て芳しく、世界が香る。一休憩の後、頂上に登る。

山頂の屋島寺の片隅を借りての

結跏趺坐、線香一本の香りの中だが、これ脱落の一語、全体迥かに塵埃を出て、非思慮の世界に遊ぶ。

屋島の合戦の舞台を見おろせば、瀬戸内の静かな海の彼方から、諸行無常と琵琶法師の声、幽かにそして寂かに流れ入り、没絃の琴の音の渡って来るようで、しばし楽しむ。

今年の遍路は、坐蒲を持参したので、好きな所で坐することが出来得たせいか、ゆったりと巡歩する。今日はどこそこまで行くと思わず、行ける所まで巡拝しよう。後は仏様にお任せすると思うと、気が楽になり、それ仏様の世界は余ることなく、欠くる事なし、とばかり歩む。

八八番打ち終り後すぐ、五巡目の巡拝に入り、途中にて巡拝を終れば、もう初夏も過ぎなんとする。

歩む中、藤の花は私を慰さめてくれ、時鳥は励ましてくれる。

天心にゆらぎのぼりの藤の花
（沢木欣一）

とばかり晩春を楽しみ、帰郷して江戸川沿いを歩めば、郭公の声天空にのぼり、夏の蝶しずかに寂かに舞い、那辺の事を這裏に行履する。

遠つ世もかく飛びたるや夏の蝶
（吉屋信子）

今年の夏は花や蝶が少なかった

初めての坐禅

取手市　恩田美智子

私にとって坐禅というものは遠い存在でありました。

しかし、ひょんな事から坐禅というものに、関心を持つようになり、龍泉院の坐禅会へと導かれる事となりました。

丁寧なご指導の下、心構えはしていたつもりでしたが、静寂な寺院のもとで老師の鳴らす鐘の音、聞きなれぬ音に、身体はビクリとなり、見よう見真似で合掌すれば、後方に老師がおられ、警策の構え「しまった！心の準備が出来てない、どうしよう…」

時既に遅し、私の戸惑いを悟られたのでしょうか、老師から警策のご指導を受けながら、静かにその時を待ちました。

やがて警策の音が鳴り響いた頃には、私の心は放心状態でした。何故なら、予想以上の音と痛みの間に全くの初心者は何を感謝すればよいのか途方にくれてしまいました。

痛みというより戸惑いが、心身に過敏に反応してしまったのでしょうか。

そのような私を他所に、粛々と坐禅が行われ、やがて終了の鐘が鳴り響いたのでした。

何とも情けない、無心どころか雑念だらけの坐禅でした。

過去、現在、未来すべてに心を静め、我が身を投じて無心であることが如何に難しい事か、理解はしていたつもりですが、やはり、かなりの困難を要するものです。

それ程までの目的意識を持っていた訳ではありませんが、私にとって坐禅とは、心身共にどのような変化をもたらすのか、益々興味（間違った表現かも知れませんが）が沸いてきました。

目まぐるしく時は流れ、人の波が休む暇も無く押し寄せてくる。

その様な時代に、とぎすまされた空間に、静かに身をゆだね、心穏やかに身を投じてみる事も、この様な時代だからこそ、必要なのでは……と。

今一度自分に問いかけて、坐禅の本当の意味を私なりに、求めてみたいと思いました。

坐禅を始めて

取手市　齋藤　純一

私は取手市で接骨院を営んでいます。今年の一月より、近所のお寺で坐禅を始めました。

仕事柄、患者さんに健康指導をしており、いろいろな健康法や鍛錬法の研究をしております。私自身もいろいろな格闘技を経験しました。

坐禅は健康法としても、私自身の精神の安定にも大変役立っています。「ため禅」は邪道かもしれませんが、初めから無為に坐れる人はいないと思います。極端な言い方をすれば、トレーニング・ジムに通う感じでも構わないと思います。若い人達も気楽に参加してもらいたいと思います。

龍泉院に出会えて、本当に良かったと思います。これからもよろしくお願いします。

筍、大豊作！

よくぞ、こんなに大きくなりました。本堂裏の竹林で、ひっそりといつの間にか伸びていた筍の姿に感動。

四月二七日も暖かい日でした。例年より温かい春は、地下の筍を充分太らせたようです。

茶話会を早々に切り上げ、長靴に日よけの帽子、軍手にはしっかりクワやスコップが握られ、あっという間に竹林の中に道友が消えていく。あの素早さにはいつもながら呆然とする。

とれた山積みの筍を紙袋に小分けして、道友はにこにこしながら持ち帰りました。しばらくは筍料理が続くに違いありません。

龍泉院様、有難うございました。

ずっしりと重いけれど、とてもうれしい

龍泉院参禅会簡介

一、**日　時**　毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）四月は八時半より坐禅作法指導

一、**坐　禅**　第一炷　口宣、坐禅三〇分
経　行　一〇分
第二炷　坐禅三〇分

一、**講　義**　木版三通、開経偈を唱えて、椎名宏雄老師より『**正法眼蔵**』の提唱を聞く。現在は「行持」下巻

一、**座　談**　自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散

一、**参加資格**　年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、**会　費**　無料

一、**成道会坐禅**　月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月七日）釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする

一、**一夜接心**　六月初旬、七炷の坐禅をし、ご提唱を聞く

沼南雑記

参禅会記録　（　）内は座談の司会

平成一五年

●三月二三日　二七名
（徳山　浩氏）

●四月二七日　三〇名
（宮本　茂氏）
坐禅、禅講後、筍掘り

●五月二五日　二七名
（寺田　健二氏）

●六月七、八日
一夜接心　二三名
於　天徳山龍泉院
幹事　中嶌　宏誠氏
永野　昭治氏

●六月二二日　二六名
（牧野　洋子氏）

●七月二七日　二六名
（三浦　輝行氏）

●八月一六日
「龍泉院施食会」作務奉仕
法話　木村誠治老師

●八月二四日　二八名
（今泉　章利氏）

●九月二八日　二六名
（寺田　哲朗氏）

▼今夏、火星の大接近。天を見上げれば、月の右下に見える赤い点が火星とのこと。となれば、宇宙の広さはいかほど。そして、旅するにはどのくらいの時間が必要となるのかしら。百千萬劫というけれど、ゼロが幾つつくのかしら。

▼以前、日本で交流のあった元留学生に会うために、マレーシアに出かけました。今までは彼らとは日本語で楽しい会話。でも彼らの子供たちとは英語しか通じません。子供たちの英語の上達の速さに、来年は私の英語力で大丈夫かしらと機上で不安になりました。日本の英語教育の問題かしら。それとも単に私個人の問題？　（宗房）

▼六万年に一度の火星の大接近に天空を見上げ、宇宙や惑星の大きさを想うのもいい。冷夏でこの地方特産の梨の不作を嘆くのも仕方ない。古代より赤星の出現は恐れられてきたが、自然の警告のサインとして、予期せぬ災害に対する心構えにしたい。避難用品の点検をしておきましょう。

▼いったんは『明珠』編集からの隠居を企んだが、引継ぎに時間がかかる細かい作業があり、編集の手伝いに復帰しています。久々にこの欄に昔の名前で出ています。
（佇泉）

●発　行／天徳山龍泉院　千葉県沼南町泉81　☎(04)7191160 9
●印　刷／岡田印刷株式会社　柏市高田1116－45　☎(04)7143131